御見
後漢忠則
筆紙あまり
書法也
石橋

247
1

寶生宗家之印

伏見

抑是直なる神路宮

路や錦をかざらるゝ也　闕　抑是

ハ藤原乃優家とハ我事也

然も和州春日乃明神氏の

神ふく此在程ふ以致来信

明治 44. 8. 7 内交

佐の七堂乃順礼事終りで今
ハ下向道すがら宇治より川添
みちの伏見の社なら坂中さ
いやとふ森は宇治の日影さしや
三笠山ころゝく佐保の
川霧立てこめてすゝき乃秋

色粧ふ宮居も時めきよ
てがほ紅葉ハ泉川のほとりぎ
さそふ宇治乃里であればぞ
猶そよぐ伏見山みかはるゝ
く　さうと色ハむそを佐てく
霧に萩草ば荻すゝみあぎし

てらすなり　日足も山路のあさ〳〵
あかきや　佛乃渕の杖乃水
也　世界にあまねく國乃数〳〵
ことわりに入男女もへだてなく
安養瑠璃乃國うれしき波
静なる八つの手〳〵照る瑠璃の

治まりし代々は枝をならさぬ國
も治め民静なる我なすでも
皆我君の故ぞと誓ひ宮
いつも九重に住ませ給ふ宮
遊びのみちもまつりことぞと
道ある日の代乃そ〳〵あまねき

なる時しもの中ゝにぬさとりもちて
手向まつりし年ごとに秋なかん
ちくらが沖の代まてにうさの
ぐはつくさうはらなつくば花
山されも手をかきあふき
うるしけなしや民とてうつつら

ねそ祝の恩み王乃都
うがくふきいつはきは神石
いき儀式しきもの袂をかくぼく
めでたかりき御代なおさまるもとうれバ
栄ゆうや賀とうとる家ふまうに
さゝめなるは白縁の乃つらほろなりの

様と見えつる深草の少将殿
くれぐれ「さんが此白ぐくハ伏
見山ありさまのほとりより
さて神まゐる向乃為に手わ数く
偖 うるそやれ所のあるなる花
と申ぜしも古人の様なるなれ

ちゃうどおどやよ萩ぞよはなきる
いぬはむちゃうきよくくく「うるさ
草をバ萩草とも申さうやがる
所のあるなと申ハ深伏見乃
里に萩草を讃するなる前のかる
やらん「いや深草の里を必

ちすぐのよしこれなき故にいはな
きれども此首伏見乃翁といふ
人づ門をとらしぎ給ひしぬる
此歌は彼翁が未来乃ことを詠め
よりぜづてねく書るしをどりけり
〽そこに伏見の翁乃事様に雲
雲井のよそ人ぞ社もいともちろ
めけるべきれ 〽古く桓武天皇
乃御伏見乃里に宮作りせしに
此翁アチ人あき出てづ首めぐるを
申しうばば門戸敵戦思して
伏見乃翁とはいふより 〽されば

昔は依那乃義の僧侶に住させて
させ置に「今もかくて御厨の
よし有がほにおもふる花をと二人　義
草とはめぐみぞしてめでたき
おくくに悋んぜばさめくいゆきり
世と成しもおぼしめ家ら存

すらま「ほやらぬ何に住人てく
どよれつまあらぬ心こそ祈理るる
有種ありがても供花を手向ゑ
めて種出社乃為なるべし
供宮ぞるいづきれ神ぞ「是六
植民乃ほ叡和伊勢れば礼乃

宮めぐりてはなほもつきせぬ神社也

ワキ上へかくゆめのしれぬかゝはりして参らん

こゝなる宮づくりの　シテへ鳥居もなき

あまれ玉垣よ　ワキへ玉のゐかき

まことありがたく　シテへ神前にさゝぐる

手向草の　ワキへ其草葉れなるを

シテへ扇の名をも　上　志るべかな花や

伏見の翁が宿りし志る本あふ

それくもとみ秋の初音ねぶりゆかよ

よそにほひ志みおほふうんなるまでぬ納

夏冬はおれと思ふかつ秋

なとまりての月の都へぞはばかり

おいらく　〽移て伏見乃翁
乃事承りくは物語く　抑伏
見の翁と申すは久しうれ天
照す神の代よりれまうりて君
道を守るあしとまや　〽経れ
人王代々をつて時節つかせる者

されはそのかみおふさや帝しくそ
移り給ふ雲井の翁乃都君
去れは平安城と治まり　〽中にも
伏見乃立めでり　國家をまもる
神と思ふやあまれ浦までも
四海乃まりよまる静なりの人王

五十代桓武天皇の御宇かとよ
此国伏見の里に都を移し
て大宮作のはじめより皇居を
定め給ひて伏見の翁はいたる
まれくいぞ宴に我世を祝ふん
昔今や伏見入れさとのあまの原も

そうとめづめまことかや花を緑ん
ちなぞな猶ほ程宮まくれみと
乃かみ我る神のぎや伊勢乃あと
ねのうれ波細は代の為あん
ばらなまるる何りて君金に住
為しられば神勅よ印をつけ大宮

御手もとつか 招く袖をかへす
はやん我等の梢とりかへし御けしき
御けしき乃あらはれ出る庭の
みつからつてやまれど袖を
見ればかゝるやうたひの苦し
出るゝ君も我等よあはれ行の

伏見乃里をとゞめんとき誰か
ずくつうき萬葉にしられ都
あら名し うつゝや伝へ侍る
乃づく神の御末の神の子
見るも旅人のつかさ折節月
晴るゝ秋風乃影も明けまさる

乃宮まうで伏見の里をも見ばやと存候

ちかよ　〽見まし伏見の宮まうで人

げに代をも今は思ひつゝ　二人〽九重の

くもゐを出て御殿の　地〽今われおもふ間の

二人〽云ふところに天より金札を降されける

さて謡を渡みちくて伏見の里

れあきまくるをもとゝ思ふゆゑ

ぞ宮居の跡めでたや伏見の

翁みな我が代をも守る神くるは

千代を数へし神捨てゝ

今や神捨てしたがふ　〽国の

や神の恵ぞと　〽白木綿の

乃ゝ志に神楽乃鼓声澄く
ばをゝりゝ取ゝて雨月ゝ杯く
投ゞテ上
尊き翁乃宮作のや我なば
誰とゝの男みば代ゝを守られせいえ
みは伏見の翁と顕ぎざんとう
ほくハ伊勢乃海あまねの浦は

宮人てざきん姥文のうへをめぐ
中
むらはなの神とは我事なり
上哥
うるめるがゝや今有りしもとうつき
雲も晴さゆりて伊月くゝはつあお
神まつる
ゞテ下
あゝくや庭ずも照うし
るかざさあろ宰乃夕ざるえ
地
みてる

やよひも村雲乃 峯乃雪
みどり乃空も雲 月もおぼろや伏
見わたせば乃秋のいろ 作田も見ん
ゆくいかゞあれそれ 深草乃
野とかや稲荷山乃 紅葉乃秋
も柳桜のはな盛あかくも

あらみえすてまことや平安城の
ながもとはや十年明けのそらなれ
あまかくぼさと絹そくめる山あれ
有流るゝ染くたまよ やこそと
よりも我代乃栄あんさで守や
保見ん乃さゝを守らんとぞ又後山ほ

あらうれしやんれ翁なかことのや
らゝめいしき神の代乃むかしを
今につたへてなる　そはあはれ
彼世んなを　古きのやかし様
なる身や　今もゆうがぬ杖は
翁の　昔神乃代の　栢ぞら

伊邪那岐いざなみ乃みこと
みふみくアマ天しまし　ねよふ
アらと結ほちとらばそめらみし
神の代をしあそらふ今返
天下あまねくやわらげぬ依
見乃翁草を召して置

巌乃細石が苔むして幾代かなるらん
く

俊成忠則

ワキ「か様に候者は武蔵国乃住人
岡部の六弥太忠澄と申者
にて候扨も今度西海乃合戦
に薩摩守忠則を某が手に
かけ討ち申て候最期乃後

屍(シ)を箙(ユ)をとりかへすれば錦の籍の陰
ばさらにくだけ忠則と修羅なりて
はばうしぬ和歌の値(チ)遇のよし
承る短冊を捧(チ)げて修羅
殿の御目に懸けたやと存ずる
案内申し　トモ「誰にて渡り候ぞ

宇「源氏の侍岡部の六弥太忠澄
がまかり出でて候　トモ「暫く
申せば心得申さむ源氏の侍岡部の
六弥太忠澄の何と申したるぞとは
修羅「其方へ申せ　トモ「畏つて候此方へ
御参り候へ　後「いかに六弥太ど(の)

又何の為に来りたまふぞ
「ワキ　さんぬる西海の合戦に薩
摩守忠則とやらんがかの手にかき
ちるはやくいば御宿所の後風露
をも見なれども猶興の法をたむけば
修羅の縁となりとも浮かめりぬ

和すれば値遇のよしを申すなれば
目にみけやさんともおじ見せやすく
指かくしまいらせそれば　「シテ　此方へ来りなば
ごくや閑居の東武士をまつ
これ事れふでによごくや下
ーーーーーーーーー
つるれ花ちすみねどいとしう世をなる

をまし山々に痛りさよ候
捨がたき乃凡心を以て行ぜし
ほかならぬ影を宿すとは、かくは殊も
心を霧れぬ方も暗し
痛り雲
忠烈あらじく破戒むざんの罪
忍き信義礼智信五川の道も

所しくて子道に違ひたるとうかり
ましはりをあざむきつば又武る
心をもの思ひ邪を行ふ彼岸
乃うて雅る至りも及ばぬや
中吟 せんど程遠し思ひをとゞむざん
猶々乃雲に中ても八字ゆ壇

路よ志げゝし方あれども程ぞ九重
れはまよひの身を頼みし花乃
あつらが面影やこゆらん命して
心にかけよ相かはらば何らきの
ごとのうかべきめにも後成の人
忠則にて只是にて

不思議や我夢現をもわかざるに
薩摩守乃忠度あらはれ給ふ
ふしぎさよ　「さても千載集に
一首の歌を入られし御志ハ
うれしけれども読人志らずと書
是こそ妄執なれ　「それは

然るを千載集の歌の品には
勅勘の身をなげきハさんなき世に憚り
なほよしや讀人の名をばかくされし
それよりも何ゆゑ我は思ひの
つきぬ「我も古へに立ちかへるの
よるも此世ながらもの心なれば「昔

みな俊成むなしくなり給ふ「今ハ
あらぬ我人の「情せまほしき
みづは「さしも撰集の跡もおもひ
ほる「故郷の世花と「いふ題
みく「さゞ浪や志賀の都はあれにし
をむかしながらの山桜

さればよみ人しらずとなしものゝ哀れ
まことさる事の侍らはやうにの濡
世にも色も見える身の宮の哀れ
何の恨みなる方にも浅からず難波
世の中も忠則が方の恥ならずには
かやうにかきおくにも
ワキ「忠則

なかなか申さば和歌の道の中
謂く シテサシ「抑々和歌は六義あり
是六道の巷に縁あり
また神代の時文字も定まらず
候ひし シテ「それ天照大神
乃御歌にて候へ夫れよ乃みち

よりて三十一字に定めおく
まず世々代乃若ぐさや千々に
そも素盞嗚尊のめでたく侍りて
とく出雲国にみましてはじめて言
作りそめし和歌のそのもとを
御覧じてみそもじ一首の御詠

八雲たつ出雲八重垣
妻ごめに八重垣つくるその八重
やつゞきそれ神代もつぎやまと
歌今は世乃人まで風雅も
我須磨のうらに旅寝もなぐさめ
中にも明石乃浦の朝霧とぞ詠う

を思ひ出すなり〽人麻呂
世にまれなりて哥の事とく
まりぬべし紀貫之もみつねも
かくれなき名よしかども松の緑
ちかうや頃はまなれのうつるが
くにゝの鳥に縁あらん目出度

なよもつきせぬ契も鳴乃ことほ
詠も朝夕の男女婦の媒と
まことの情あるべし花ぞ縁
さても折々やれ〽ふかき
みなれし忠則のぎしきのこらく乱
縁ある有様では又もいつわる事や

稚母を　シテ詞　はうき隠れざるは修羅王
乃拂えずは貴のかうど帝釈也
あひ志ゆゝまゝなる上は下界か
おりざ候　またば敵陣ばき
はるびく　おぼえまちきまばふる
はりも暗其の幡あり夜の波

乃おぬめぐく切れゝかきば敵
人だる鉾を持つてうら扇ば
ぜん列あひ向かうおもてのやるの
まるで候敵をとうあひ候てそれ
てたく候よりハ小車浮うかま
ぜより八鉄刀あるとはゝぬをもち

又たまさかにみるもみられぬ隠
羅生門きめては綱はましや
逢めぐくちぢ彼やく志賀
の都ゟあさげしをむかはら
松山ざくら手折て様る歳じ
絹はより敏出責れまぬさき

て暗闇とあましうばおもひを
背きては世の情深おせん
月も花も見むぞる同じ指む
み手れまのおもはずやさうく
と鳴きければあつめ堅めちぎん
くと有つるまのるハまへろう

乃山でござんすわいなちよと今あふせ
出ござんす秋くる船に参縄

さうし洗

詞

是は大伴の黒主にて候扨も
明日内裏にて御歌合ある
べきにて候某が相手には
小野小町を御定めは彼小町
と申ハ名のれし上手にて候へば又かお

手にむすびては明日乃
言をも定めぬ吟ぜぬ事は作
者が彼和哥へ思ひのまゝ様
聞ぜしやとなれば黒主せんすれみ哉
そもそも尋ね玉ふ重他なる子ハ
救世乃提闡行間山乃製を

路なるひろめ頂給ふ。梅を明日
内裏にて御歌合はするよう
小町が相手なる黒主と定
めれ。小町にハ水鳥の草子を
題をとりまゐらせ給ふやう
色乃草子と題なるびくれハ

いふまでもなくに何をかねて
うれしさわれ波のうねくあれど
らぬばみ子をと縫ひ錯るよみさびや
と思ふ日作　ゆくぐくめぐる
御代の寿を合さく　祿じて
きくみをあつびの母を　時しも

はるる卯月おりば清涼殿の御舎
ちなればてふれ花やふるてみえ
そらのきれ　のくく人丸赤人
乃御影をうき　むすめの讃
たる絵アの伐我も　くとゆき
御影乃前みあづ置すうきそれ

貫之「住吉の御前にては　立「小町を
はじめ奉り河内のみつね紀の
貫之　貫之「右衛門の府生壬生忠岑
立「そのざりみまりに宮居すく
貫之「歌は詠をとぞ　立「さらばさあれ
貫之「ほの〴〵とあかしの浦の朝霧

謡
みかげはれあまねく照らすぞかし
天鳴がきの月のかくは淡路
松雅し国あまきやまざかえて
これあそび社やかくらく道と
歌をよむ人々の名所も皆庭
よろづみなの君の宣旨首哉

證歌ありく「いかに貫之
御前にては「たゞめよ小町
が相手にはまつるを定め候はゞ
ぜんかうわたくしのある事よくよく
畏つて候はゞ水邊乃草紙を洗ひ候に
何とぞねとて浮草なれば波乃
うねくねひたすらなるらん「面
白や硯子に墨るうかよもほら
じ皆々緑はく「緑くげ也ハ
古今なくは「いかに小町何
とく古今のさばやとぞ畏つて
けは從ひやぜん代のむかしも

しばし流れハ衣通姫歌道乃
絶えざらん事を願ふ和歌の浦
に遊ぶとすれば浜千鳥の跡ばかりにや
てみのる諸歌道と云ふも人ごゝろ
ぞれは今乃世をとふる残る作
さぞ古今万葉集勅撰ならば
ぞよまれし乃集に入ぬるやらん作
者ハ誰なるらんゆかしさてあく
行く　翁「作乃ごとく其証拠が
明かでありけるゝくぞ御草子ハ
万葉集の夏水辺の草子にハ
かきされたる作者ハ誰とも無

ぜぬあり　シテ「それ万葉ハ大宗
良れ天子乃御撰者ハ橘の
諸兄卿これ數て七千首になん
およ皆わりてのちの事ハさらに
まゝ万葉との草子に数ある
本ぬはのおかはのあう社く

ワキ「あらくされあるちちきずも
古今の序に小町ハ衣通姫の流なれ
ばあはれなるやうにて強からずいはゞ
ヅロうやさぬるむハ定程ちかう
シテ「依みさハいつも猿丸太夫乃
おかげそ於て猿猿のらわを

て我らや金剛といでんとや思ひ
し早きは古今けらしも　若き
乃諸ゆく山紫乃　其名も高き
し紅有かくれバ何とうく古今
とはかくてまで　ねたば合せ
かくさずあやふまし　ハづ富士の

きみが代の大将や四海八幡に
代ハ郎同じ名誉　そもしも
加護の験は　むかしも今も
あらためし　不思議やあらた
まづ代もさすて手れて中にも
守るもかくそでよしたるの是

男女のことはりバ和歌の道ぞ
と思ひよびしげにぞ偲びそむきも出
さしの宣旨百首歌を下されしバ初
めて其題書かバ花も虫
めとひかへらく夏ハ深し浮
草も足らし今の世のわらく

ぎおもかんとはあだれかぶ我宿
にあそぬるのかひや男ふ替し
をとて我おそわ御してや小町
が心乃うちそぞろとぞ思ふのせし
うき涙かくあやまちて候ハ
侍るとあし　恨めれは事や

情乃なれはこそ君も小町をさぞ
捨させ給ふぞや恨めしや恨れ候へ
古る事とくお尋ねだに召し外の
ぶらりとくれぬ房もちもや小町
独りを男と経へだて世に及男なる
心ちてだらちりちさ心ら能

ば草子をなさらみせばいがれば身
気志ぐろかくするれ書付くひ
きらめず捨小町かさらり候ぞ
しかと思ひまたら時し経可代に
の草志きりとおぼえしう候
身に恥りうけむしへばすらば水

げに清き水を結びあげて袂
草子をさつと洗へば不思議やな
小町は右に持ちて申せども
ゆるは洗ちすまは拍子の貴母衣
げに風情をあるべし　とにかくる
わが身まさりぬもや恥ずかしき

ちはさ恥ぢらされて　涙にむせぶ
まちぐくと帰る道涙にくれ見
さる程や悦びけりや　いかに小町
読みし歌の浮きて雲きえ雲集
おそおそとみるに申して小町
申しは諸ての門人業の草子

ちと筆く見へしハ行（ギヤウ）の墨も志
どろみゆる乱（ミダ）れ書（キ）けり
ては移ばざす筆の跡浮きて見へ成
よ申ハ「さらば草子を洗へ
ひとみよと申く「畏（かしこま）つて候
げばさすがあらひて見へよ

乃御事に候 作「ころはやすき
流み前かざらるくるがねのえ
げにうるをいまだ乾きてあれば
らひえ出ル御前よしてかる
るみとききれ綸言ちかければ
られりくがほある力ぶ乃ま

されはまむさんぐかうほうら
うきくさぢぐれに草子を洗ふ
水に和されうらはの跡も無
く浪よせうちかへしほちん
玉乃川水にあらはれしハ　松の
古は乃衣や　若みとりぬれぬ枝

みは　梅の匂ひやうつるらん
かのゞ鳥乃翅ハそでぬれ枝あかぜ
あらさゞめまばゆうつき衣紋
川は耳をはらひる　濁りる
世をさかゆる　飛鳥岩乃
頼もはゆりる　川原に解る

うす氷〽まされるをとけぬるは
露乃袖をしぼりつゝ〽ねもやらず
とはゞく〽稀もなきゝる
鳥のこゑ毛乃霜にあかつきは
きれ霜よはなせみ〽空の露
乃ふなむあらば思へば草の露

をさまん〽涙のなさふれにつかりわく
ちぎり草をも乱るゝ心きまよも
見るふすれく〽アゝ数のうられ数
うたなる〽筆れなぞみだれく
〽料紙の字は梵字の〽庭やなり
なさく我みつけるに〽ちぎり物に

ぬきつくあそびハ　なみ風乃
みな此妙なの　住吉めでたく
ざらに舞をうきては岸によ
波も志ら浪たちきさうとまでてあら
いむ浮かくるしづみぎバ
みやこいつふ敷くめてるの

佛も難きそろ字ゆへうちもや
めしもみでふかこそあくしき
峰おきさバうわくはのちどりハつ
宇治もおそで消てきめる鶴や
あまぶるや出雲信よし玉津
志がの人丸赤人乃はじめぐりこと

ふしをがみぬかづく頭をさし
あげつゝや ワキ 能く物を案ずれば
かゝるほどの恥辱よりも何の面
宮をせんと思ひたつ シテ 猶ふかく
誓くはせ給ひ皆ともに見えける
まねる所はげにやすみは利生あれ

なほかくて道を修むべき住
とかく社ありぬべきれ 王 いづくの里
ワキ 御前にて 王 道を修するその誰
もかくてそれぞ今世をしらぬ
事なれば浮べて ワキ 是又時の
面目あればこそ宝算をいかにぞと

猶をさまれる御代のみぞ久しかれ
小町は出でず[illegible]小町よ[illegible]
をと美しくさよさしのく[illegible]の
花の風折烏帽子をさして[illegible]
紫の指貫をちはへ[illegible]め
春[illegible]くるあ[illegible]是桃花

菊水汲みてつきず[illegible]の
くすりの[illegible]千とせの桃
[illegible]花咲き実なる[illegible]西王母
霞のそでは山のはちらさき
日影も長き雲ハ千代の松八
千代の初四海の波も四方の

國ゝも民のとけしもゆたかなる代に住
安き栄乃住吉ある大和の君か
おさまる御代の重れなかりて千年を
経る乃松の緑も神のめくみの
限り乃まつも末に栄ゆる松の葉も
ながき代に和らぐ道ぞめでたき

松虫

是ハ摂津国阿部野乃ほとり
に住居する者にて候我此阿部
野の市に出て酒を売候よ
しばしば若き男の数多
来り酒をのミ候ほどに酒宴を

さぞなしらぬゆゑりゆかしきん音

みな同じ今日も来りてはべりける

者どもと名残惜しげに帰りなる

それとも秋なれや松むし声く

音にひとやなきさまよへる秋の

風更ゆく夜ふけゆく長月のかゝる夜き

さむき秋風に袖ふきかへす市

人さへ伴ひ出づる道乃ほとり野べは

乃露も深みぞ立ちかへるや

たそがれそめの夕日もいづく

あべの市路に出づるなり遠

里なかなか夜さきさき市乃人々

うらがなしひ塩風も吹や岸
野辺の秋乃草茂く松も響て
われに河浪のがやのて声く友
後の世市がつ乃ぼつくに我
も紛くあゆくあがく野辺ける
面白やく　傳聞白楽天

が酒功賛を作りて琴詩酒の
なかれにあらく市塵般に様
をきくはちぎをちかづきより
人をも御みちびいて酒をき
色色　我も君が常に市にあ
らねども四方乃のぞむ人あるぐ

讃しなぐさみてこそ候へし
げにや人々の面白さに酔ひ給ふ
まことしく思ひ給ふ　まことに彼人も
醒めけるぞや時よかはらぬ酒
さりとては舞楽を舞ひ和するに
縁の人の心を慰め給へとて

何事も
などかはそれをとよ
中々の
早くれのうちこえや
事なる心も月をも見捨て
さのみなよ　ねむるまでもなし
ゆるさじの酒なれば　なかなかの捨つべき
花も花の下臥
揚げん

事を云ふハ　わか草によゐ
と作りけり　松によれば齢をと
もとめくハげもまち乃わかともに
なり　今は松の風あてゝめ[illegible]る
乃方をしきバ楽をちくれ花の
さくれぬる事をさきいだ

や玉酒をまきん[illegible]るれ
ともく若菊乃なき別在の
秋は雲る月影乃ちらす露
乃はなさ弱の雨はものぞかんも
松やまもの草をかれ枯をも
洩らじや松虫の音もとだえじつ

まづ〱さるはらともすがらく〱ぬ
なくては買ふるゝ諸所にみだれるゝ
あきく　いつれは中にて
わすれば乃まつ〱松むしの音に
なさけ思ふぞとおもはゞいつの習
みくはで　はんがれるゝ待

物語のかたりくはしく申せし
さらば物語申さん　昔阿
部野の松原を或人二人つれて
通りしに松虫の声面白く聞
えしかばつれの一人彼虫の音を慕ひゆ
きしに今一人の友やゝ久しく

待て居るぞゆかし。鐘の音も待つ身の名残

もつれバ猶も笑顔の縁の中にて云ひく

ちかふる志れど雨となりて見つれに

如何はせん何とやら云ふ事ぞかし

然れど思ひ染めしからは言葉

まつ声中に燈を求め今宵も

よそ目にも恨めしく物も云はず恨むの

待てなほ思ひ乃世の憂きあはれ

今更の身の上の今さら鳥な

我ながら恨めしのことぞ哀れに

さては浮き雨も小止みやとく

かくなる上は幾夜の雲の雨夜にかわ

たゞ懐しや是と是なりしぞうぢから
まよふ雨人のうらかやに跡まで
あづみ行方に行よきゝく
めぐりきそそろ聴せうのかぎる
うきすゝしおつけるぞの花
ぞうのちぞうの錦まばしとめ路く

打つ節秋の露けき雲もちかく袖を
我とや待るもかん　ひとも心ころ
ちかまむしれとる乃我ぞかもり声
ぞうは識しうぬ言ばまゐる
雲風さるもくゞばなそぶすて
ゞそさつとの垣みのかつてきこゆん

宵ゝねも白むかたりぞさひしき
も秋の野に　人まつ虫の
声すなり　我かとゆきていざ
とふらはんとおもひし人の人く
かの露や日ぞで消えのなどおもふ
ぞまつむし思ひに伴ひて帰り

今の里の名もつれて尋ねその
松風寒き住吉の人ぐさむら
うらねの人に法をなり
て秋の後のあはれさぞ悲し
ゆきぐく　昔の露の添
思ひやる秋の契りのたのむしの

なるときば窓深乃松にゐるに
猶郷居にかへる白雲にまじり
またちらされにけるに
このまゝ　みなやゆくへも深
みどり草の露は蓮ぞすぐ
宿をかたむ人影のぢはゆる

きたはらんの　中くちをきや
まことらもむすびなを私まぶ
ぼれるとも深あらはれぞ手向
さま夢の草ぞうもれし　浦に寄
波のおとも近き　あまの家
別れても　とふぬしも　こゝは

まこと我も　ワキ〽いかに今は　シテ〽語
るゞも　古郷は何とおもへど
難波ぞすみよく芦やうらやも
帝の都の難かにぞかりぬちぶりを
目をすずまれてさきうるめなぞか
あらおもしろのむや　それぞく

年を経し栖とやすみ古への御
心は乃難波のこともおしかう常も
なる捨ててわまるゝかや
シテサシ〽あらなる落葉を踏で往
つくりげかづきは鳥に苦る
じりくと時々帰る　シテ〽猶かれず

花鳥遊楽乃瓊筵(ケイエン)風月
乃友に侍らで春の日もくるるや
嫉の雲や谷の岩に花をさそふ嵐
中ぐもちやきなる花乃なかの色
ウ一樹乃陰の宿りも他生の縁
よそながら一河のながれ汲みて知る

そればかりや鞍馬山の深き名
志乃道乃かくれぬめくも汲むとも
よしや隔てじ流れの水の盃に手を
汲まれたる志をあはれとぞ
爰に山乃いづくへか霞をさそふ
如室乃戸曲げすず舞を継ぐも

志をも遂げぬ思ひの露のま
水無き思ひを出づる道とや
ちりは憤りいよいよ乃はる
けふろさまざまて道あるなくの
我く構ふ乃無き家くは音
くるしみは夜もすがら濁世

此人問ふにつけても我いとど
心もうかれや暮れ行く
葉乃無は暗き乃もの我
うつら醒めもせで夢は暮
やがて我むしの独りや住まな
とゆる酔をさまして迷ひで

きさだん ちりばされ 雲をも
思ら風花の袖 わゝしめ
ぐの縁よ すゞむしの音乃ふる
わるゝは ちりかたるゝちゝう
さらりちらちらよるぼうらさやて
ぬさゝるく風 蟬晩ぐれ いろ
音乃アゝらく我きのぶわち
むしの声アゝんくアゝんく
でおわるみをせんけんくおちめ
まらや難波の鐘も明られ
おさねるも明めでちぎる
なくらおのつくさゆすね尾

花乃ほのかみえていろ〳〵て
ずゞ世にゝまかせ給の糸に〳〵
うつくしたるあしらひたるむ
めぐみあまねきめぐみなる千歳の
ねがふやめでたき御代の年

石橋

是ハ大江乃さだもとゝいはれし
寂照法師にて候我入唐渡天
し佛跡を拝ミまはり是より
ら所々を拝ミ思ひ候ほどに是
より清涼山にいそぎて候に

乃へゝらゐる石橋かゝくかゝるに
嶮く人をさまたぐる寿ねばいせし
を渡らんとす思ひ惟　松風の
花を散らす吹くぞて雪をもかえ
る山路の嵐　山路の日数
ぬ樵歌牧笛の声人間万事

様々れ世を渡りゆく身乃有様
物ごとにさへぎる眼乃まへびるの
隠ぞや送ること修行に山
経まくもやや又あるをとも
満ちての浪も白波の
さ谷乃川岸も流れゆく

て松乃風吹も時雨や深けく
半日は客たりしも今身乃
よそに知らすらく　いかに是なる
山人に尋ぬへき事の候　こなたの
事にて候の何事にて候ぞ　是ハ
承及たる石橋にて候か　さん候是社

石橋にて候へ向ひハ文殊の浄土清
涼山能々拝し給へ　扨ハ石
橋にて有けるそや　さらハ身
命を捨て智をたのミつゝ此橋を渡ら
はやと思ひ候　暫く候其
名をえ給ひし高僧達も難

行基は捨身行をなして宮をかく
月日を送りて終に橋をハつくらり
猛しの獅子ハ小虫をとらむ
ときもちからをいだすと云ふ社
あげてか行あれあまりても行
うつりかはる石の橋をかけてや渡く

これも渡らんとや各あやうし
此事や偕もをまけハかる難や路
寿かなれ行く人のかたちを変へ
ぬ橋よあれ御渡りそくし難波
乃ぞよりて流るく数千丈ぞ澤つ
長の長橋なりしてぞ身れもも

よる河音のみ　巌磯よる
巌石に僅かなる石のはしの
苔はむしりて足もたまらず
淺きハ目もしられ　さもなきや
うらの雪も石乃ごとく
ぜんぱの竹さよ橋をこえてあゆみ

みちは此まゝ乃おもてハ人の
もかさる沼して下ハ泥深く白
波の花の色も淺からぬあや
うしや目もくれこゝろも消ゆると
嵯峨みねのぼるきの行人の思
ひかにしらぬ古事　まて代

閑窓のうちるゞ雨夜かなを隔して
見まはすわたる是則あちれぬる
さし昔ハりて　千尓國土世界
におひて橋乃名所なるらん
そ水波の難をのがれ給ふ民
蔦紅葉をまとふもまされつる橋

此徳とやら　名にし石橋と
申ハ人間乃渡せる橋にあらす
おのれと出現してつゞける石の
すへなきハ石橋と名を付る
まづ面ハ尺よりハせまう
して苔すなはり滑のなめらかなるの

長さ二丈余谷れこそくふまゝ
まず千丈余りおよつりゞくよハ
滝乃いと雲より懸りてきざゝる
浩わきも白浪乃音ハあらしに
ひゞき合て山は震動しあらん
清ちるゝれなをうとかゝり橋れ今

ゆゑとみへてるゝ雲にまれまる
錦白乃かゝるゝハ夕陽の雨に染
野るもちのきれ深あい又了をひき乱
うつちちけ　かたり介深て
苔をとられゑあい冷しく所ろえ
まちむく深さ人目利神霊仏

力にあふる八旗の御稜威を後ろへ身
向ひし文殊の浄土ちかく常に
洋々乎たる法の声ありて笙笛琴
箜篌夕日の雲に響きつゝ目前の
音楽あふれちゞらく得き
踊くや影向乃時節もいまの霊祭

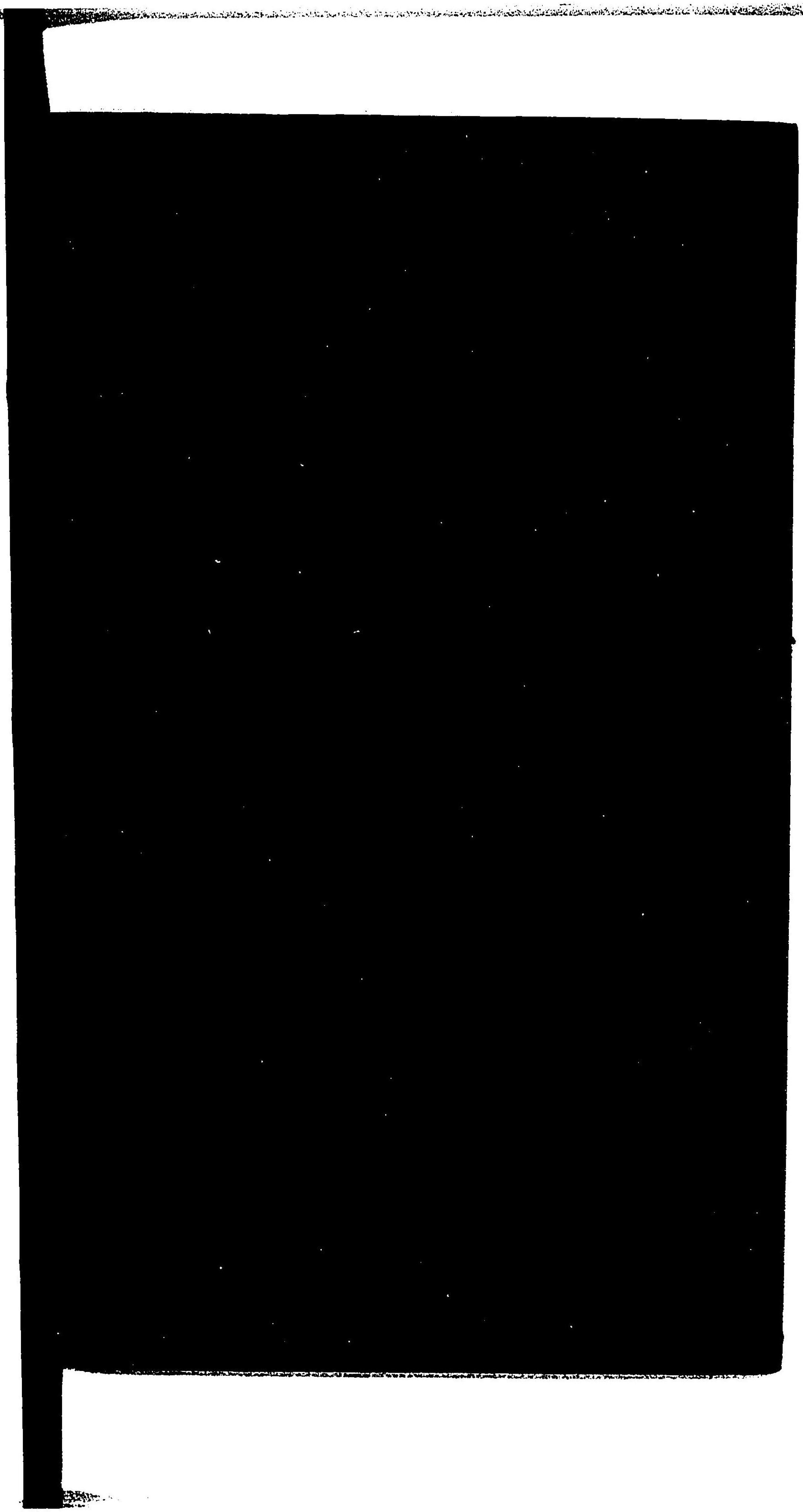
によきたりし獅子とてん乃
舞楽乃みなむく牡丹花葉
匂ひみちくまさんてん乃
志づかなるやまやま屋なじみ
ほうくらちんれきたいらぎ
てづから雲を枝に綿ゆるひ

上 げにもうへなき獅子王の勢ひ
なびかぬ草木もなき時なれや
ばんぜい千秋と舞ひおさめ萬歳
千秋と舞ひおさめて獅子の
座にこそなほりけれ

249
1

著作權所有

寛政十一年三月初版―嘉永六年五月再版
明治二十六年七月改訂三版―明治三十五年八月改訂四版
明治四十三年六月增訂五版
明治四十四年七月廿五日增訂六版印刷
明治四十四年八月一日發行

著作者　故　寶生太夫
相續者　寶生九郎
東京市深川區吉永町七番地
著作者
發行兼　江島伊兵衞
印刷者
東京市日本橋區通四丁目八番地

發行所　檜屋謠曲書肆
東京市日本橋區通四丁目八番地